オウム対策住民協議会ニュース

烏山地域
オウム真理教対策
住民協議会

講演「オウムの暴走を許したのは誰か！」

オウム真理教犯罪被害者支援機構副理事長
弁護士　中村裕二氏

烏山地域オウム真理教対策住民協議会　第39回学習会要旨

11月9日（土）烏山地域オウム真理教対策住民協議会が主催した、第39回抗議デモには約190名が参加した。その後、中村裕二氏による「オウムの暴走を許したのは誰か！」が講演され、警察組織の捜査のあり方を中心に組織の壁など四つの壁について語られた。

四つの壁

オウム真理教事件は、坂本弁護士一家殺害事件、目黒公証役場事務長殺害事件、松本サリン事件、地下鉄サリン事件の四大事件となる。その外の事件も含め現時点で判明しているだけで46名が殺害されている。このようなオウム真理教の暴走を許したのは、警察・検察組織の前に立ちはだかった大きな壁があった。それは 1宗教団体の壁、2警察管轄の壁、3化学捜査の壁、4警察組織の壁だった。

坂本弁護士一家殺害事件とは

坂本弁護士は、オウム真理教から子どもを取り返したいと信者の親から相談を受けていた。教団と話し合いをするが「親とは縁を切っているので、親ではない、娘さんが病気になっても、死んでも返しません」と突き放す。東京都知事から宗教法人の資格をとってからは、話をすることすら拒否するようになる。1989年10月に坂本弁護士はTBSの取材を受ける。その後TBSは、上祐等幹部信者が訪問した際に、教団の圧力に負け、坂本弁護士を取材したビデオを見せると共に、テレビ放映も中止した。10月31日、教団幹部信者が横浜法律事務所を訪問「活動を続ければ子どもを使って親を訴える」と恫喝。坂本弁護士は民事訴訟や刑事告発の準備を進めていたが、その3日後の11月4日未明に、坂本弁護士一家殺害事件が発生する。坂本堤さん33歳、都子（さとこ）さん29歳、龍彦ちゃん1歳2ケ月が横浜市洋光台の自宅で殺害される。三人が使っていた布団がない、教団のバッジが落ちていた、敷居やタンスに血痕など誰が見ても異常な状態。ところが神奈川県警は十分な捜査もせず、「旅行かもしれない」「事件性は不明」「借金を抱えて逃げた」「仕事の報酬を持ち逃げした」などと、新聞社に情報を流したと思われる。肝心なオウムを捜査しないで、オウム以外をつぶせとのトップの判断があり、現場の警察官に苦労を強いた。これが組織の壁だ。

解決のチャンスはあった

一つは、神奈川県警と横浜法律事務所に90年2月に手紙が届く。龍彦ちゃんを埋めた場所の地図と写真が入っていた。かなり以前から神奈川県警は岡崎一明（2018年7月死刑執行）が書いたものと認識していたが、警察は当初から手紙を軽視していた。地図は正確で詳細な現地の様子も書かれていた。その地図と同じ位置から龍彦ちゃんの遺体が見つかったのは、地下鉄サリン事件後の95年9月10日。坂本事件から約6年が経過していた。岡崎の手紙を元に神奈川県警がしっかり捜査をしていれば教団の暴走も含め、その後の全ての事件はなかった。しかも神奈川県警は、この手紙を「いたずら」と横浜法律事務所の同僚に話していた。2つ目は、90年10月、早川紀代秀（2018年7月死刑執行）が熊本県の国土利用計画違反で、出頭し逮捕されたときのこと。早川は警察からの尋問で坂本事件について自供寸前までいった。ところが、教団の街宣車が警察の周囲で「黙秘するぞ、黙秘するぞ」との麻原のテープが流れたことで自供には至らなかった。91年坂本弁護士一家を救う会が中心となり、千葉景子参議院議員と国松警察庁刑事局長に面会し回答を得たが「相手が特殊な集団なので、慎重に捜査を進めている」とのことだった。「慎重に捜査」、これが宗教団体の壁であった。

長野県警にも3つの問題点

松本サリン事件では、現場の警察官は、会社員のKYさんを捜査してもサリン事件にはつながらないと感じていたが、トップがKYをあげろ、と強行に主張したため、オウム真理教に捜査の矛先が向くことはなかった。これが組織の壁。また、警察にはサリンの知見がなく、警察が作成した押収品目録の化学式も間違っていた。これが化学捜査の壁。坂本事件は神奈川県警が捜査していたが、長野県警はオウム教団の情報の共有をしていなかった。これが管轄の壁。

マスコミ・メディアの問題点

TBSは坂本さんをインタビューしたビデオを教団幹部に見せてしまう。このことを坂本さんに伝えずに、しかも、教団の圧力に負け坂本さんのインタビュー映像も放映しなかった。坂本さんの映像を放映していたら、坂本事件はなかったかもしれない。教団の記事を書けば、「宗教弾圧」と言われ、教団にとってまずい記事は書けないと感じた人はいなかったか。松本サリン事件で、メディアが警察情報を疑いもせずに、右から左に報道していなかったか。KYさんの押収目録をたよりに、専門家に取材して、サリンは作れないと確認した記者はいなかったか。麻原から独占取材が出来ると言われ、かわりに警察情報を提供したマスコミはいなかったか。オウム真理教を面白おかしく描いた番組もあった。さらに宗教学者・知識人・有名人が、教団を擁護した現実など多くの問題点があった。

坂本弁護士の母、坂本さちよさん

2018年7月死刑となった12人のオウム信者の親たちを思い「私は堤や都子の友人たちに支えられているが、死刑となった12人の両親はどんな思いでいるのか。葬儀もあげられず、誰からも支えられず、ひっそりと遺骨を抱えているのでしょうか」と話されている。さちよさんは息子家族がいなくなってから、全国をまわり救出を訴えてきた。その活動を支えたのが、死刑になった信者の親たちです。その子どもたち信者が、真っ先に犠牲になった。麻原の行為は断じて許せない。最後に、烏山の住民協議会の活動は、全国各地のオウム真理教と戦う住民協議会の見本となっていると語った。さらに今日話した4つの壁は警察組織だけのことではなく、国民一人一人にもあるのではないか。私たちは人を助けているでしょうか。「見て見ぬふり」をしないことが、子どもや孫に、安全で平和な社会をつないでいく大きな力になると思いますと結んだ。

第39回　抗議デモ・学習会アンケート報告

【実 施 日】 令和元年 11 月 9 日（土）
【回収枚数】 42 枚
【参加回数】 初めて（12）、２回目（3）、３回目（4）、４回目（1）、５回目（3）、6回目（1）、7回目（0）、８回目（1）、9回目（0）、10回以上（17）

【抗議デモ・学習会への感想】
・オウムの事をあまり知らなかったけど、今回は参加して良かったです。
・自分の中にある「壁」を意識して取り除くことの大切さを感じた。（宗教団体の壁・管轄の壁・化学捜査の壁・組織の壁）
・忘却しつつあった初期の事件がわかりやすく整理されていました。いかに日本の組織が信用できないか、これは昨今も痛切に感じます。事なかれ主義、迎合主義も痛い。
・詳しく当時の状況が改めてわかった。
・風化が進まない様にしなければと思った。オウム事件で知らない事がかなりあった。若い職員にも伝えなければと思った。
・中村氏の講演はとてもわかりやすく、聞きやすく、参加して良かったです。
・オウムの暴走を許したのは誰か!!　警察庁の幹部の人は何もしなかった。警察官の上司の人たちの一言は大きい。10回は参加しているが今迄で今日の学習会が一番良かった。
・改めてオウムが行ってきた活動の悲惨さを感じた。
・見て見ぬふりを皆がしていた事、警察の捜査のなすりあいで地下鉄サリン事件につながってしまったと思います。
・今日は参加して良かった。冷や汗が出た。警察にはがっかりした。話を聞いて良かった。これからも力を入れて参加する。
・オウムの問題を改めて見直し、四つの壁を教えていただきありがとうございました。
・資料で今まで知らなかった事実を知ることができて良かった。（印刷物の中に講師の先生の紹介を入れてほしかった）

【協議会活動について】
・住民一人ひとりがまじめに活動しています。少しずつですが前進していると思います。
・脱会者の声でデモをどう感じていたか(プレッシャーを受けていた)という紹介があり住民協議会の活動の重要性を再確認できた。
・監視活動等を引き続き行っていてご苦労さまです。
・オウム真理教が日本から無くなるまでがんばってほしいです。
・若い世代に伝える為にもがんばって活動をして下さい。

第39回抗議デモの抗議文

抗　議　文

上祐率いるオウム真理教・ひかりの輪にとって、今や観察処分の取り消しこそが、１番の目的だろう。観察処分から外れる事で、ひかりの輪は、国からも認められた集団だとアピール出来るからだ。警察、公安調査庁、地域住民の監視を早く終わらせ、組織強化を目論んでいるだろうが、我々は、絶対に監視を止めない。現に、よほどのストレスなのか観察処分の取り消し裁判を、その都度起こしている。

しかし、今年２月２８日の東京高等裁判所は、一審の判決を覆し、ひかりの輪の観察処分を継続する判決を言い渡した。ひかりの輪はさぞ、落胆しているだろう。

何度も言うが、アレフから脱退して、「ひかりの輪」を作った時から同じところに住んで、看板だけアレフから「ひかりの輪」に変えて、自分たちは別の団体だと言い張っても、そんな言い分は誰も信用しない。

地下鉄サリン事件から２４年経った今、オウム真理教が起こした事件だったことを、若い人は気づかないかもしれない。だが、世界で初めて猛毒化学兵器サリンを使って不特定多数の国民を殺害し、未曾有の被害者を生んだオウム真理教は、全世界の歴史に悪名高く刻まれている。そのオウム真理教がいくら名前を変えても、サリン事件を起こしたオウムはオウムである。

一体いつまで地域住民を不安に貶め、この厳しい監視体制の中で組織を維持してゆくつもりなのか。この監視が続く限り、ひかりの輪は解散する選択肢しかない。我々は、それに対する支援は惜しまない。

今後も住民協議会は、烏山にオウム真理教・ひかりの輪がいる限り、気持ちを緩めること無く解散・解体するまで闘ってゆく。

令和元年１１月９日

烏山地域オウム真理教対策住民協議会
会長　古馬一行

サリン被害者に風化はない⑤　悪魔の兵器サリンはどのように作られたか？

松本・地下鉄サリン事件は、一般市民を標的にサリンを使用した地球上で最初の事件となる。麻原は教団への捜査撹乱を目的に遠藤誠一にサリン製造を命じた。だが遠藤は獣医師で化学については知識がなく、土谷正実が主にサリンなどの化学兵器の製造に従事する。旧上九一色村（現富士河口町）にあった教団施設の土谷棟（クシティガバル棟）や、ジーヴァカ棟でサリンが製造され松本サリン事件で使用された。1995年1月、読売新聞が警察情報として、オウム真理教施設の土壌から、サリンを検出と報じる。警察の強制捜査を恐れ、量産体制に入っていた第7サティアンの製造を急遽中止する。3月に公証役場事務長殺害事件で、オウム真理教信者の指紋が検出されたことで、麻原は捜査を避ける目的で、地下鉄にサリン散布を指示する。急遽製造の司令をうけたのが、遠藤と医師の中川智正だった。2人とも化学者ではなかったが、土谷の助言を受け事件日未明にサリンを完成させる。麻原は、階級制度・省庁制で信者の自尊心をくすぐり、強制力を強め、自らの欲望を満たす行為に突き進んだ。信者は、死者が出ることを知りながら、なぜサリンを製造し散布出来たのか。その心中は信者によって違うが、それを知ることは今は出来ない。

住民協議会活動報告

11月15日（金）　市区町連絡会大臣要請参加
11月25日（月）　編集会議　協議会ニュース191号初校正
11月26日（火）　実行委員会
12月２日（月）　編集会議　協議会ニュース191号再校正
12月５日（木）　事務局会議
12月10日（火）　協議会ニュース191号発行
12月10日(火)　世田谷区主催「オウム真理教問題講演会」に参加

協議会ホームページアドレス　http://www.kyogikai.jp

この協議会ニュースは、皆様の募金により発行されています。

本紙についてのお問い合わせ：世田谷区南烏山6-22-14　烏山総合支所内住民協議会　電話 03（3326）1202・FAX 03（3326）1050